

1608年版、1623年版、1681年版の『リア王』：王政復古期の改作と翻案の真髓

梅宮 悠（早稲田大学）

発表要旨：

ウィリアム・シェイクスピアが執筆した『リア王』では、高齢となった王が領地を娘に分譲したところから歯車が狂い、主人公はこれまでの恩を仇で返されるかのように虐げられ、戸外に追い出され、狂い、やがて失意のうちに絶命する。この主軸の他にも嫡男と私生児の関係性や、物乞いや盲目といった社会的弱者にも触れられるため、『リア王』には現代の観客にも訴えかける魅力が内在しているのだ。ヤン・コットが「最も我らの時代に則したシェイクスピア劇」と称した400年以上昔の戯曲は、近年でも実に多くの舞台化が行われている。例えば、英国の王立シェイクスピア劇団（以下RSC）が2000年に入ってから6回（2002年、2004年、2007年、2010年、2012年、2016年）上演した他、ロンドンに再建されたグローブ座では2022年の6月10日からかつて2010年のRSC版に道化役で出演していた女優キャサリン・ハンターがリアとして登場する予定となっている。それ以外にも、2007年のRSCの舞台を賑わしたイアン・マッカランは2018年にはロンドンのヨーク公劇場で同役を再演し、2010年には同じくロンドンのドンマー・ウェアハウスで名優デレック・ジャコビが老王を好演するなど、その上演回数は21世紀になっても減る傾向にはない。

現存する最古の版本は1608年の出版を謳っており、テムズ河近くのグローブ座で活動している劇団が、クリスマス期間の聖ステファノの日に王の御前上演を行ったとされている。1603年にイングランド王として即位したジェームズ1世は、スコットランドとの領土統一をしたばかりか、当時二男二女を持つ父親でもあったため、リアの物語と無関係とはいえない。なお、リアの逸話はラファエル・ホリンシェットの『ホリンシェットの年代記』にある他、'King LEIR'、あるいは'Kinge leare'と題する先行作品に収められている。そこにシェイクスピアが自身の創作を加えたものが現存する『リア王』となるのだ。しかし、この1608年の四つ折り本も、後に出版される1623年の第一二つ折り本に収録されている『リア王』と異なる箇所が散見し、それらの関係性についての議論はいまだに決着していない。また、共和政時代の劇場閉鎖を経て、王政復古期になるとネイハム・テイトの翻案作品が登場し、シェイクスピアの『リア王』は舞台から一時的に遠ざかることになった。後にサミュエル・ジョンソンがテイト版と比較してシェイクスピアの原作はあまりに悲惨な終わり方をしてしていると指摘しているほど、テイトの翻案は長く人々の趣向に合致していたと思われる。

本発表は1608年版と1623年版の合併テキストが主流となった現在にあって、初期版本の関係性を改めて確認し、そこに1681年の初演以来19世紀に至るまでシェイクスピアの『リア王』に取って代わっていたテイト版を加え、時事性に注目しながら翻案のあるべき姿に迫ることを目的とするものである。

杉田 隆瑞 (香川大学)

発表要旨：

日本で本格的にイギリスの小説が翻訳されるようになったのは明治10年代である。それ以降翻訳の主流作品は、シェイクスピア作品を除けば、ウォルター・スコットやブルワー・リットンなど18世紀以降の小説であった。坪内逍遙が西洋小説の技法を高く評価した『小説神髓』において、とりわけ重用したように、明治黎明期の日本にあって19世紀イギリス小説は自国の文学を近代化するためのよいお手本だったのである。そのような事情を考慮すれば、19世紀を代表するチャールズ・ディケンズの作品が翻訳されるようになったのも不思議なことではない。事実、*Sketches of Young Couples*(1840)の一部を翻訳した明治15年の『西洋夫婦事情』を皮切りに、初期の*Sketches by Boz*(1836)に含まれる短編作品や、*Oliver Twist*(1837-39)や*David Copperfield*(1849-50)といった長編小説の翻訳、翻案あるいは抄訳などが次々と世に出された。

これらの翻訳・翻案作品に関して先行研究で真っ先に指摘されるのは、明治期日本人にまったくなじみのなかった西洋の文化や風俗を翻訳・翻案者が日本風アレンジする手並についてである。たとえば、ディケンズの*A Christmas Carol*(1843)を翻案した饗庭篁村の「影法師」(明治21年)においては、キリスト教文化に不慣れた読者のために原作のクリスマス・イヴが大晦日に移され、作中の人物名も主人公スクルージを佐平次とするなど和名への変更がなされている。ディケンズの翻訳・翻案作品におけるこれら外面的な受容のあり方に関する指摘はすでに十分になされている。しかし、ディケンズ作品の翻訳に一定の傾向があったのか、あるいはその本質を訳者たちがどこに見定めていたか、についてはまだまだ議論の余地があるはずだ。

その上で、重要な手掛かりとなるのが、翻訳における人称の問題である。先行研究において、板坂元をはじめとする多くの研究者が江戸時代までの日本語に三人称はなかったと指摘するように(板坂 119-20)、人称という概念もまた外国文学によってもたらされたものであった。ディケンズの小説は三人称で書かれたものが大半であり、やはり人称の問題は訳者を悩ませた問題であったと考えられる。とりわけ、物語の筋よりもユニークな作中の人物同士の絡み合いが主眼に置かれる初期作品において、三人称を用いた全知の語りによる人物描写とそれに伴う人物造形は、作品の本質に関わる重要な問題であると考えられる。

そのため本発表では、ディケンズの*Sketches by Boz*の短編の翻訳・翻案を対象を絞り、翻訳作品における人物造形の変化を主に人称の観点から注目することで、原作のどの部分が前景化されたのか、言い換えれば後景化されたのは、どの部分であるかを明らかにしたい。

ふたつの『オセロー』：坪内逍遙の訳文改訂の考察

星 隆弘（文教大学）

発表要旨：

本研究は坪内逍遙訳『オセロー』の新旧版の訳文二種を比較し、逍遙が最晩年に実践した「口語体訳」の特徴を考察することを目的とする。逍遙によるシェイクスピア翻訳出版は当初『沙翁傑作集』と銘打たれ、明治42年に本格始動した。旧訳版『オセロー』が刊行されたのは明治44年、その当時の翻訳態度を振り返って、逍遙は「文語口語錯交譯時代」と評している。しかし、旧訳『オセロー』で示したような訳文には狂言臭い、歌舞伎臭いという評判が聞こえ、逍遙自身もあまり面白くない出来だと感じていたらしい。その後数年のうちに翻訳の手心を改めて、現代口語訳を志向するようになる。『沙翁傑作集』として20冊を訳了したのちは『シェークスピア全集』に改称してさらに19冊を訳出し、約20年をかけた翻訳プロジェクトは昭和3年に完了した。一般普及版として『新修シェークスピア全集』の刊行が決まったのは、5年後の昭和8年だった。誤訳などを修正した改訂版が同年10月から毎月2冊ずつ配布され、逍遙没後3ヶ月目の昭和10年5月に完成した。

この改訂作業は、早いものならば三日程度で一作品を仕上げるというほどの速度で行われていたが、『オセロー』については例外的に全面的改訳を決意して後回しにし、着手したのは昭和9年12月初旬、完了は翌年1月の半ばだった。一行たりとも朱の入っていない行はなかったというほどの凄まじい改稿で、逍遙の文学上の最後の仕事となった。

『オセロー』改訳の手法については、逍遙自身の翻訳論がなにより詳しく、広く紹介されてもいる。逍遙がそれほどまでに『オセロー』にこだわり、改訳の必要を感じた理由も説明されている。しかし、旧訳と新訳を並べて訳語の一語一句の異同を調べ上げた研究は乏しく、逍遙の翻訳手法の検証や裏付けが十分に行われているとはいえない。そこで本研究は、まず全面的な訳語の比較考察からはじめたいと思う。改訳にあたって逍遙が参照した編纂テキスト、対訳註釈本、先行翻訳作品などにも可能な限り照合し、新訳に採用された訳語にどのような特徴が見出せるかを分析する。